

母を語る

善光寺住職 黒田 武志

新しい年を迎えて母を亡くしました。昨日、実家で茶毘にして帰って参りました。おめでたい時にこれを申し上げてどうかと思いましたが、私も皆様と同様に両親がりましたが、諸行は無常であり、今は一人とも亡くなりました。「会うは別れの始めなり」ということであります。母は最後の一ヶ月間は宇都宮の独協大学病院に入院しており、九十歳の生涯でありました。私も何も悔いることはありませんが、本当に生前、皆様方始めお寺でお手伝いいただく多くの方にお世話になりました。母に代わって、厚くお礼を申し上げます。

皆さんに私の母のことを申し上げるのは大変僭越ではありますが、私の母は遠慮に遠慮して、決して人の前に立つようなことはしない小柄な母で、父の十メートルぐらい後から、黙ってついて行くというような人生を送りました。従いまして、そういう性格でありましたから、人様の前に出て話しをしたり、何か書いて残そうというようなことを一度も考えない母でありました。母に関しては何の記録もありませんので、皆様に私の母の一端を、お話しさせていただけれぱと思っておりますのでお許しを頂戴してご不快な、お聞苦しいことあるうかと思えます

が、方丈は勝手にお話しをしているとお思い頂いて、軽くお聞き流していただきたいと思っております。

昨日夕方帰りまして、留守のことや本日（節分）の準備を、院代始めこの寺で毎日お手伝いをしていただいている皆様にお願いをしております。準備が整いましたので、早目に休もうかなと、十一時少し前に休みました。夜中の一時半に起きて、三時に起きて、五時に何とはなしに起きたのですね。四時頃でしたか、夢の中で私がある島の岸におりまして、強い風がきました。すると、波がいきなりワーツと三メートルも四メートルも上がって、思わず「あつ、その子どもさんたち、だめだーっ、早く逃げないと海の中に入っちゃう、逃げろ！」と叫びました。ところが今度はこっちのほうで早く逃げなくちゃだめということでそこを去り、そこがどうなっているかと再び戻って来たら、また、

どんどん風が吹いてきて、最後にある岩まで、そこが流されたら困るんだと思っっているうちに流され、いやいや全て失った……というところで、目が覚めました。さて、これは何の夢だったのか。考えておりましたが、一切を捨てて生きた母親の生きざまではなかったかと感じました。これは、私利私欲を捨てて仏様にお尽くしをした母の姿であり、私に対する忠告ではないかと思っております。

母は長野の須坂市の安養寺という小さいお寺に生まれました。後に父親は興国寺というお寺の住職となって移り、そこで育ちました。母には弟二人おりましたが、どういうわけか二人とも若くして死にました。母は長野から栃木の寺に嫁ぎましたが、その寺は火事の後で、住居全体が小さく、十六畳の本堂と左右に八畳と六畳の部屋、台所が板の間で戸もないようなバラックで、そこで生活しておりました。そういう

ところへ嫁いできましたから、「いやいや、これはえらいことになった」と。あんまり小さいし、貧しい寺ですから「何度も帰ろうと思った」ということであります。母が嫁いで来る前にお寺から火が出て、風も強く町の大半を焼く大火になりました。それでおばあさんは毎日「申し訳ない、申し訳ない」と謝っておりました。そこへ母が嫁ぎました。母は須坂ではわりかた恵まれた生活をしておりましたが、おばあさんは厳格な上にさらに厳しく、「女が生まれたら離婚をしてほしい。絶対に女は生まないでほしい」というのが、嫁いできた母に対する最初の言葉でした。「まあびつくりした。女が生まれたら連れて帰らなければならぬ。どうなるかと思った」というのでした。そして最初に、男が生まれました。しかし四歳でバナナを食べ過ぎて、大腸カタルで死にました。「さあ、困ったな」ということで、お寺ですから跡継ぎがないと困りま

す。そこで弟子を迎えます。ところがどういうわけか、次々と生まれてくる子どもが全部男で、八人生まれましたがみんな男でしたので離婚されずにすみました。小さかった寺も父と母が苦勞をし、皆様のお力添えで大きな寺になりましたが、終戦直後などは収入がありません。学校へ行く子どもがたくさんいて、それは貧乏をしておりました。それに父は若くして出世をし、昭和二十六年から大本山總持寺に勤めをしておりまして、それなりに費用が掛かり、支払いができない。それを私は見ておりまして、「おふくろは本当に哀れなものだ。貧乏をさせたくない」と、小さい時から、唯一つ肝に銘じ、魂に銘じたことでした。母親が皆さんに、迷惑を掛けることに対して、「本当に申し訳ない」と言っていたのが私の小さい時の印象であります。母は一メートル五〇センチをここですから、昔のご飯の釜が持てない。ですからどうしても私が手

伝ってやらねばなりません。兄弟は七人おりましたが、それぞれに勉強したりしていましたが、私は常に母親だけは粗末にしたいくないと、自転車でお使いなどにも行って、少しは母親の役に立つような心掛けだけはしたつもりでしたが、やったことといえば親不孝の最たることだけでした。

前々日に雪が降って、昨日はまだ雪が残り、庭もぬかり、斎場に行きましても山のような雪が積もっておりましたが、純白の清い雪の中でお葬儀をして、汚れない素晴らしいところで茶毘にして「これでよかったなあ」と思っております。皆様に本当にお世話になりましたが、申し上げましたように、常々合掌して多くの皆様にお世話になってありがたい、又子供達には「あなた方のところが何とかなるように」と、いつも口ぐせに言っておりまして。私も皆様のお陰で少しづつ良くなりつつあるところであり

ます。生前ご厚情を頂戴いたしましたことを重ねて厚くお礼を申しあげてあります。私は六男坊でありますので、母は滅多にこちらへは参りませんでした。何か行事がある時だけ参りました。「皆様にお礼を」と言いますと恥ずかしくて「いやいや、私はいい」とこう申すものですから、ろくなご挨拶も申し上げませんでした。皆様のおかげで善光寺が少しづつ形が整って参りまして、厚く厚くお礼を申し上げるわけでございます。私は喪主ではありません。全て田舎の方で致しますので御了承頂きたいと思っております。

母はつねづね「おじいちゃん、おばあちゃんをどうぞ大事にしていたきたい。また、おじいちゃん、おばあちゃんは、お孫さんよりお嫁さんに好かれますようにお願いします。どうぞ親子はご円満に、姑さんとも仲良くしていただきたく思います」と申しておりまして。私の母

の最後の願いの一端を申し上げ生前のご厚情に
対して重ねて厚くお礼のことばにかえさせてい
ただきます。

(節分会での挨拶より)



